

第七回 美しい日本語で詩を読む会

朗読詩集 2019.12.15



未知からのメッセージ	有馬 敲	3	互換の爛熟	浜田 千秋	25
届かない手紙	村田 辰夫	6	幸福	下田喜久美	27
郵便受けのなかに	武西 良和	7	彼方からの手紙	波野 仁	28
勇次郎からの葉書	井上 良子	9	宛名のない手紙	清水 崇彦	30
母の手紙	市原 礼子	11	空からの 地の底からの招待状		
投函する	加納 由将	13		長岡 紀子	32
招待状	北原 千代	14	言い訳	根来真知子	34
珊瑚の耳飾り	司 由衣	16	ミツルの手紙〔抜粋〕	すみくらまりこ	36
内なる声	和比古	18			
扉	小湖舎 伸行	19			
古い物語	小湖舎 みなみ	21			
スカイスクレイパー・マドリガル					
上村多恵子		23			

未知からのメッセージ

有馬 敲

わたしのみずぼらしい言葉が

ひろびろとした海原をわたって

大地をたがやす少女の濡れた頬を

少しでも乾かせるものなら

わたしのかぼそい低い声が

いくつも重なる山脈を越えて

街路にはたらく少年の飢えた心を

わずかでも充たせるものなら

大陸からやってきた若い友よ

伝えてくれ 母国のやさしい言葉で

列島を通りすぎるそよ風に乘せて

遠くまでとどくアクセントを

※※※

感じますか あなたは

宇宙からの信号を

書きしるせますか 君は

世界からのひらめきを

体温をもった人間の肉体は

冷酷なコンピューターの端末機よりも

はるかに優しいところで

すばやいしぐさで

未知からのことばを送受信し

きつと自己確認と他者伝達ができる

この世の人間にとって

もつとも幸せなことは

心臓の鼓動がつづいているうちに

宇宙世界の背後にある何者かのエネルギーと

霊的な交流ができることだろう

あなたは産めるか

自己以外の何者かと交流することによって

ういういしい生命をもつ物体を

君は創りだせるか

自己の思考を発信することによって

みごとに独り立ちした分身を

届かない手紙

村田 辰夫

来るはずの手紙がまだ来ない

書かれていたに違いない手紙がまだ届かない

待ち始めてから数十年

どこで宙に舞っているのか分からない

個室の病室は花で一杯だったとき

なぜか あなたの呼ぶ声が聞こえたので

会いたくなって家の方に行ったのだが

玄関の扉はとぎされたままだった

これが最後のチャンスだったとは

書かれていたはずの手紙がまだ届かない

「あなたは最後まで私のロメオ」様

「ロメ（空白）」その後の（オ）の字のところが

滲んで 消えかけている

そんな手紙がまだ来ない

書かれていたに違いない手紙が

まだ届かない

いつまで待ったらいいのだろうか

「ロメ（オ）様」と書かれているはずの

手紙がまだ来ない

そんな手紙を待っている

郵便受けのなかに

武西 良和

いつ入ったのか

背を向けたまま顔を見せない

どんな背中也

だれの背中也

背中というものはいつも寂しい

家々が並んだ古い通りに

ぽつんぽつんとある空き家から聞こえる

亡くなった人たちの声

この家でもじいさんが亡くなり

ばあさんは老人ホームに入ってしまった

ここには誰も住んでいない

届くものといえど町役場からくる

お知らせくらいだったが

今はもう何も届かなくなって久しい

空白の郵便受けに落胆した衝撃は大きく

何の便りも読むことなく

仲間からも離れてひっそり

そこは入りやすいが出にくい構造

四角い箱のなかは狭く昼間でも薄暗い

空っぽの暗闇は何に対しても無関心だ

家々の上を飛んでいたとき

郵便受けが目に入った

そこはあまりに静かで中の空間に

吸い寄せられるように自分が

新しい手紙になって

闇には慣れていたはずだが

闇の扱い方を思いつかず

狭い空間の闇と

広々とした山の闇の違いのなかで

急速に体力を使い果たして

今また扉を開けてみると

身体向きが変わっている

動かなくなって今なお

届けられるものを待ちわびていたのか

自分という情報が急速に古びていくのを悟って

ぼくのなかにもときどき

開け放った窓からコガネムシが入ってきて

うずくまっていることがある

生きているのか死んでいるのかさえ分からないほど

落ち着き払って動かないが

羽が金や銀に光って遠く故郷が

山に還っていく姿を伝える

勇次郎からの葉書

井上 良子

この家を建てた時

庭に植えたコスモスを

母はみんな抜いた

母の母が死んだとき

野辺にコスモスが

揺れていた

その時 母の父は

北海道の北の端

山あいの小さな村で

母の母は死んだ

その時 母の父は

北海道の北の端

山あいの小さな村の

倉の重なる屋敷に

あたらしい母が来た

ふたりの子を連れて

母は出た親戚の家へ

倉の重なる昆布屋敷

90 になった母が

郵便局の封筒に

貯めた年賀状

差出人の勇次郎の名の

横に小さく矢印をひき

父と書き込み

母の字で

小さな公園のブランコに乗った

しばらくは座ったまま

でも静かさに絶えきれず

漕ぎ始め

いよいよ大きく

暗闇の外へ飛び出すほどに

漕ぎ続けていくにつれ蘇ってくる

幼い頃の恐ろしい記憶

ブランコの動きを止め

隣のブランコに乗り換えた

さっきまで乗っていたブランコは

すっかり動かなくなった

暗い寂しさにまみれて

もう誰にも気づかれないほど

暗くなったなか

ブランコを下りて

鉄棒に走った

自分の家もブランコも

握った鉄棒の冷たさも

みんなシルエットになって薄く

母の手紙

市原 礼子

手紙が ほしい

手紙 書いて

私の言葉に母は困った顔をした

手紙なんか書いたことないのに

ひとり暮らしを始めて

甘えたい気持が言わせた

手紙がほしい だった

母からの小包が届いた

手作りの半纏（はんてん）とミカンに混じって

白い封筒が入っていた

なにも書くことはありませんが

元気ですか

風邪を引かないように・・・

そんな言葉が書かれていた

ちゃんと書いてくれた

うれしかった

半世紀前の母からの手紙

離れて住む息子に手紙を書こうとした

あれこれ考えたのに

母と同じになっていた

元気ですか

風邪を引かないように・・・

息子はなんて思うだろう

投函する

加納 由将

手紙を投函する

祈りをこめて

書いた手紙

あなたに

届いてほしい

祈り

渾身の

言葉を探して

書いた

手紙を

投函するとき

手を合わせる

あなたの

笑顔が

戻ってきますように

どうか

いつか戻ってきますように

招待状

北原 千代

夕餉^{ゆうげ}のころ来て下さい

尖った靴を脱いだら

ぼくのスニーカー貸してあげます

どうですか

にびにび土に埋もれながら畝^{うね}を歩くのは

ジャガイモは好きですか

厨^{くりや}に戻って蒸かしましょう

バタにしますか 味噌もいけます

青草が繁るころ もう一度来て下さい

緑蔭はミミズや虫たちの遊技場

生き物たちの腕自慢やのど自慢の声

聞こえますか 耳こそばゆいですか

熟したトマトとバジルを籠に

畝を渡って厨へもどり

パスタはどうですか

なあにぼくが上手に茹であげます

楚々として奔放なコスモスが咲くころ

新米食べに来て下さい

ただ美しいだけの花などひとつもない

秋の花たちは収穫の喜びを歌うのです

地上三十階のあなたのベランダに

新しい命の種子 あげましようか

冬の畑の養生は もみから 粃殻と麦わら

手厚くやります 身に来て下さい

大根と白菜の半分は漬物に

半分は畑に置いてこう

そのものたちの鍋は

湯気からもう旨いのです

地酒は辛口 飲んでみますか

昔むかし人の足が踏みしめ

踏みしめ造った厨に続くこの畝を

ぼくはあなたと歩きたいから

この手紙を読んだら 来て下さい

夕餉のころかならず 来て下さい

わたしが庭の 肉桂の樹だったころ

少年はわたしを齧った

ひとしきり

根っこをしゃぶってから

しろい仔犬を

わたしに抱かせた

わたしが庭の 肉桂の樹だったころ

夏はけだるく

赤い痛みをおび

呼びあう声に

骨がふるえた

珊瑚の耳飾り

司 由衣

一本のえんぴつがあれば

その人は ものを書く

南の島の独り居の

死の床でさえ希望に変えて

もう叶わぬほどに

指さきが動かなくなった日

あとにも さきにも

たった一度だけ

その人は携帯に電話をかけてきた

書いたことばは

万人のためのものとなるでしょう

けれどたったいま

たった一人の女人が読んでくれるなら

それだけでぼくの心はいっぱいになります

それが最後となった

その人のことばは

幽かで聞きとりにくかったが

初めて聞く とぎれとぎれの声は

南の島の湖騒のようにも

女の耳に寄せては返してきた

行ったこともない 南の島の

会ったこともない もの書く人の

一人の女人のために沸々と書きしたためる

男の息づかいが

女の左耳に

取り外しのきかない

珊瑚の耳飾りとなつて

ぶらさがっている

内なる声

和比古

昼間のまどろみに

目覚めるときを忘れる

外は青い空

白い雲に乗ってきたように

ふわりとした手紙が届く

綴れた言葉に

友愛が字間から感じられる

こころのハードルがなくなり

自らの魂に

癒されたやさしさが戻って来る

風鈴の爽やかな音の中に

自らの感性で表現した

新たな心象風景を生む

空を散策しながら

こころはさらに変貌していく

太陽に向かって

ひまわりが笑っている

大学に入学したのに

少年は故意に留年して

危険な峠における

自動車レースで

いのちをはっていた

扉

小湖舎 伸行

君を無くしたあの日から

僕の手紙は君には届かない

想いを叫んだところで空は応えることはない

どれほど夜空が美しくても

月の光が穏やかでも

僕のためではなかった

僕は何を求めていたのか？

答えは出なかった

君の言葉を理解できなかった僕には

襲いかかる喪失感と絶望

膝を崩した僕を支えるものなど期待はしない

未来は重厚で知恵は皆無だ

部屋に積もる封書

「封書」とはよく言ったものだ

鏡の中の僕はどんな顔してるのかな？

鏡の中の君はどんな顔してるのだろう

鏡の中の僕の口角を少し吊り上げてみた

期待通りのおかしな顔だ

僕はそのまま手紙のベッドに飛び込んだ

人に翼が生えていたら人は空を飛べていたのだろうか

「心に翼が生えてないと無理だよ」

君の無邪気な顔が鮮明に脳裏をよぎった

あの日の乾いた風とともに

僕は苦笑いをしてそのまま眠った

口角を吊り上げた可笑しな男が独り

君の想いとともに

古い物語

小湖舎　みなみ

時を超えて繋がった糸が

螺旋状に愛し合って

私を離してはくれないんだけど

あなたはいつまで私を繋ぎ留められるの？

引きちぎれて

ほどけて

結び目などどこにも有りはしないのに

シロツメグサの花飾り

教室の隅に割れて転がったチョーク

ボンドの匂いの美術室

割れたクラリネットのマウスピース

絡まってしまったら断ち切るしかなさそう

夏の匂いなんて来年に持ち越したら

また歳を取ってしまうわ

従姉妹に子どもが産まれたのは

去年の前の年のこと

つまりもう私には要らないんだけど

地球規模のエコ問題とか

街角の流行とか

あなたのくだらないやさしさとか

去年の水着と一緒に棄てていくわ

スカイスクレイパー・マドリガル

上村 多恵子

やっぱり

ここへ

きてしまう

スカイスクレイパー

タバコの煙のせい

いまは

悪女志願ではないわ

そうね

フェザー級

ここから街をみるの

そして

風船をふくらますのと

全く

逆の要領で

ゆつくり

吸いこむ

ええ、落ち着くのぢやないか

という錯覚が拡がる時

流れるようなひとときは

視たような

視ないようなたそがれで

染まつてゆく

スカイスクレイパー

恋人達は小指の大きさ

バス・ターミナルは人差し指

はじくと

山かげの夕陽が沈んでしまう

さあ

キャンドルに灯りがついた

ピアノニッシモ

アンド

ピアノニッシモ

ていちように

アンド

ていちように

こんなにもやさしく

タバコをすって

遠い国のアメジスト

付け届けいたします

スカイスクレイパーより

夕焼けが海に沈む

（『消失点まで』）

互換の爛熟

浜田 千秋

憶測と引き換えに

結果に売り渡す過程

軽薄に蹂躪される

陰惨な汗血（あせ・ち）

成就のための営みは

光に跳ねられ

途切れる感覚は

無味の認識に侵食される

普遍の交信に於いて

個の価値は否定され

煩悩のみが美徳と化す

勝利に反射する喪失

洒落と賞賛され

蔓延する虚偽の安寧

進化という病に

絶滅を危惧する玉葉てがみ

治癒を切望する愚者

尊台（あなたさまへ）

根強い足音を

満たされた囁きを

磨かれた視線を

親愛という咎（とが）を

少年たちよ

大志など抱くな

挫折の元となるだけだ

何事も信じすぎるな

騙されるし、裏切られる

いま抱えている悩みや怖れていることは

る年経てば大したものでもなくなる

お金に苦勞したことのない者が

「世の中、金じゃない」と言う

必死で努力したことのない者が

「努力より才能だ」と言う

戦争に行かない政治家が

君たちを戦争に送る

自分の感覚を大切にせよ

違和感、嫌悪感、罪悪感を特に大切にせよ

怒り、悲しみ、痛み・・・

負の感情は純粹だ

すぐに綺麗事でかき消されたり塗り潰されたりしてしまう

物事は見えてるよりずっと複雑だ

嫌だと感じた事実を大切にせよ

幸福

下田喜久美

ほんとうに あなたの苦しみを
知り得た ことを 感謝します
言葉だけでなく
まなざしだけでなく
一つの心を 私自身のように
わかり 得た ことを

勇気の あった私を 感謝します
悲しみに引きちぎられた 髪をといて
嵐にざわめいた 湖を 静めて
爽やかな風の吹く 白い道を

みどりが手まねきする 五月の道を
やはり 帰ってきた わたし

一つの心が
決して切れないロープであつたと 確かめた時
天まで登る 豆の木に
憧れた 黄色い ところが
一つ一つ築きあげた
大きなビルディング

夕べの一風呂
そしてユリカゴ
カナリヤのさえずりが
私の胸に 目覚めを呼んだ

彼方からの手紙

波野 仁

彼方から舞い込んだ

君の手紙を開くと

盲しいになってしまった

だから

手探りで君を求める旅に出た

持っているのは

針が動かない時計と

針が動き回る羅針盤

頼みの綱は踵（きびす）の記憶と

指先に残った君への愛

扉を押して

粘る大気を泳いで渡り

登っているのに下る坂を越えたら

明後日には琴座のヴェガの下（もと）

咲き誇るジャカラランダの木陰で

眠りながら唱う君に

辿り着く

柔らかな歌声に満たされ

艶かしい香りに包（くる）まれた

その純白の首筋に

指先の愛を振り巻き

そっと目覚めさせるよ

だから

盲しいた僕の代わりに

君の手紙を聴かせておくれ

綴った想いを注いでおくれ

そして僕の中で愛が

膨（ふく）れ

迸（ほとばし）り

熱を帯びたら

夜の帳（とばり）が消えないうちに

灼熱の口づけを

捧げるから

昨夜（ゆうべ）を殺した夜明けに急かされ

ライ麦畑で生捕りにしたツグミ

折角（せっかく）生捕りにしたのに

帰ると母さんがすぐに縊（くび）り殺した

「だってあなたのお祝いのツグミパイにするのだから」

母さんはそう言うときすぐさま羽根を筆（むし）りはじめた

ブチブチブチブチ 羽根を筆る

すると隣の少女が泣き出した

「可哀想、可哀想、ツグミが裸にされてるわ」

メソメソメソメソ 泣き出した

ブチブチブチブチ

メソメソメソメソ

僕は思わず耳を塞ぐ

「さあ そのポケットのライ麦を出しなさい」

唐突に母さんが指図した

僕は意味が分からず呆然啞然

宛名のない手紙

清水 崇彦

ごらん みんな歩いて行く

前を見つめ どこへ行くのだろう

男女 若者 子供 老人

足早な人 遅い人 けれど 誰も振り返らない

前方から来る人はいない

だから みんな後ろ姿だ

思いおもいに背を向け

押し黙ったまま歩いて行く

去って行く背中に風が舞う

※※※※※※※※※※

君は書いたことがあるだろうか

受取人のいない手紙を

投函されることのない手紙

誰に宛てたわけでもない

言葉が滲むだけの手紙を

感じることは瞬時に現れる

思うことだつて ふと閃く

思念や心象には訳があるものだ

それを掬い取り文字に変える

脈絡や論理などいらない

心や記憶の孤独な反芻

未来への臃げな想い

私はどこから来て どこへ行く

自分はどんな存在なのか

どのように存在するのか

もしかして 誰かの後ろ姿に

そっと呼びかけようというのか

けれど 私の言葉は届くまい

きつと声だつて届きはしない

だから 名宛人は誰もいない

私はただ書く それでいい

つまりは 自分のために書く

自分は自分であり

自分は他者でもある

手紙はいずれ自分自身に還る

※※※※※※※※※※

私は歩く 私も歩く ひたすら歩く

振り返りはしない

顔を合せる人もいない

行き着く先も霧の中だ だが

立ち止まりはしない 歩き続ける

空からの 地の底からの招待状

長岡 紀子

なにやら空から舞い降りてくる

ありや

背中に羽つけた天使さんかえ

かわいいなあ

何々 お手紙持ってきたって

「花好き

樹が好き

空好き

人好き

夢あり

地球人さま

どうぞ天国にお出で下さい」

さあさ 羽根つけて 雲の靴はいて

ご一緒に空を飛んでいきましょう

なにやら地面がもこもこ動いてるう

ありや

角つけて怖い顔した鬼さんだあ

閻魔さまのお使いか

何々 手紙持ってきたって

「怠惰

陰陰

渋ちん

親不孝

貪欲

嫌われ人さま

どうぞ地獄にお出で下さい」

さあさ 手ぬぐい被って鉄の下駄履いて

一緒に土の中潜って逝こうぜ

わては どっちに行ったらええのかえ

言い訳

根来真知子

夏のはじめに

便りを書こうと思ったのです

——暑くなりましたね と書き出したまま

あとが続かず 夏は盛りとなり

——暑い日が続きますね と書いただけで

ペンは止まり やがて立秋もすぎ

——少し涼しくなりましたね と書こうと

して 何故か身ぶるいをし

私は便りがかけないまま

夏が終ろうとするのを知って

ぽつんと涙をおとしたのです

便りを書こうと思っていたのです

夏の
間中
・
・
・

サイバー・シティから

ミツルの手紙「抜粋」

すみくらまりこむ

サイバー・シティの第二十二日目

一方通行じゃない

そちらのことは全部みえてる

こちらのことを知らせて

安心してほしいと思うボクです

そちらでは 一生は長く

なかなか苦しいよね

お金って 何だったろう

同等の価値があるものと交換できる券

貯めたり 使ったり

借りたり 返したり

怒ったり 喜んだり

妬んだり 諦めたり

祈るひともあるそうだ

金運がくるという波動を信じるひとも

そんななかでも

創作やパフォーマンスはどうだろう

一円にもならないって

詩人がボヤいていたね

それは需要と供給の関係なんだ

歌はコンスタントに売れている

だんだんとデジタル化する

そんな時代だったよな

みな価値観が変わって

見えないものの存在を気づき始めて

でも怖くて

信じたくないって

こちらではこうだ

創作には価値がつく

未来を描いたイメージを

かたちにしてきたからね

ボクも あこがれる絵がある

こんな風にできるなら 楽しんで描く

ともかく元気になっているよ

また様子を知らせます

非売品

二〇一九年十二月十五日

(C) 日本国際詩人協会